

研究ノート

中エジプト・アコリス遺跡の転用例にみる諸問題

森川 愛美

中エジプト・アコリス遺跡にある、かつての西方神殿域の上層は、コプト期の建物址が広がっている。その建物址には、前代の神殿材や碑、オリーブ搾油器などを建材として再利用した形跡が随所に確認できる。このような再利用材を建築史学の分野では「スポリア」と呼ぶ。本稿では西方神殿域のスポリアを対象とし、ローマ時代からコプト期にかけての人々の宗教的心性の変容とその背景に迫ることを試みた。

検討の結果、西方神殿域の再利用には2種類の例が存在することを明らかにした。すなわち、スポリアの持つ象徴性の利用を意図した再利用と、本来の用途を無視した実用的転用である。前者の例は後2世紀頃にみられ、ローマ本国の支配がアコリスのようなエジプ

トの地方社会にも行き届いていたことを示していると推測した。一方、後者の例は6-7世紀に集中しており、在来宗教の権威の消失及び都市の拡充があいまっていたことを意味すると考察した。ただし、一部の実用的転用例からは、在来宗教の記憶の残存が垣間みえる。また実用的転用例はアコリスのみならず、広く地中海沿岸にもみられるため、この現象は地中海世界と同調した動きであった可能性を示唆した。

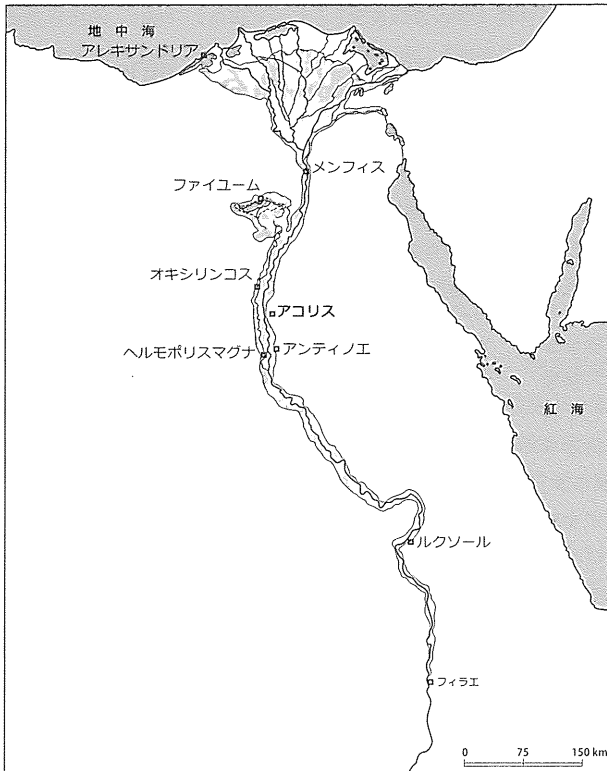
西方神殿域の転用例は、アコリスの固有の事情を内包しつつ、エジプト全土さらには地中海世界との同調をみせており、エジプトの古代末期を考えるうえで貴重な資料といえよう。

I. はじめに

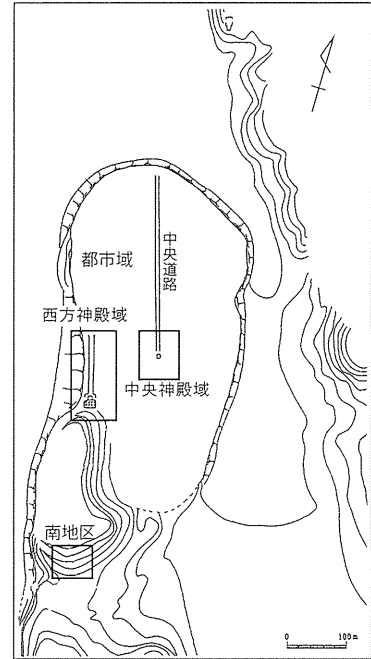
エジプトの首都カイロから南へ約230km遡った、ナイル河東岸の可耕地と低位砂漠の狭間に、アコリス¹⁾遺跡が位置する(第1・2図)。遺跡の一角にランドマークとなる岩山が屹立し、北-東の600×300mほどの範囲に日乾レンガ建物址が広がっている(都市域)。表層に露出しているのはローマ・コプト時代の遺構で、イスラム時代に入った8世紀を前後して人々の活動が途絶えた痕跡である。

この岩山の北裾で中王国時代に複数の廟墓が営まれたが、ローマ時代に、このうちのひとつをネロ帝が拡張して多柱室などを加え、神殿(西方神殿)として整備した。この西方神殿を含め岩山の外圍だけでも、古王国時代からコプト期まで約3000年にわたる人々の活動が確認できる。

遺跡の調査は1900年代初頭にフランス隊による西方神殿域の調査・修復に端を発し、現在は日本隊(発掘隊長:川西宏幸筑波大学教授)が調査を継続している。1世紀余の間に蓄積された調査結果は多大であり、詳細は報告書にゆだねるが、この神殿域で長期にわたって実施された建造活動を概観すると、前代の建造物の再利用が随所に認められる。このような再利用行



第1図 アコリス遺跡の位置
(Baines and Malek 1983 を改変)

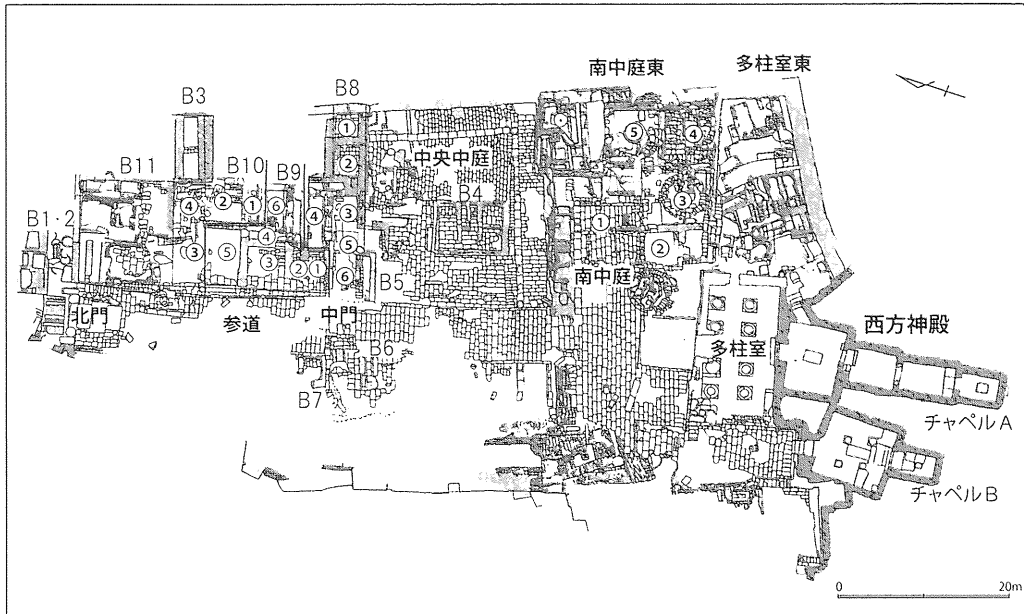


第2図 アコリス遺跡全土
(Kawanishi and Tsujimura 1995 を改変)

為はアコリス遺跡だけに限らず、広く古代エジプト全体の遺構で知られているが、これまで研究対象として本格的に取り上げられることはなかったように思われる。

そもそも、ある時代の主体者たちが、過去の人々やその人たちによる創造物をどのように認識し、対応したかという動態を明らかにする考古学的研究は、20世紀末より盛んになった分野である。この研究における重要な概念は、社会的記憶 (social memory もしくは folk memory) が象徴的資源を媒体として次世代の人々の行為に影響を与えるということである (溝口 1993)。象徴的資源は、権威的な諸関係を正当化する機能や、共同体を維持する機能を持つといわれ、その対象となるのはストーンヘンジのような巨大な石造物や記念碑、先史時代の墳墓²⁾、「場」そのものなど、集団によって異なる。ただし、この研究を進めるにあたっては、埋葬や行為を繰り返した年代や順序の詳細を明らかにすることが前提となる。

再利用の研究は、建築史学において盛んに研究されており、特にローマ建築が対象となる。再利用の研究で注目されるのは既存の建造物やその部材の再利用であり、再利用材を「スポリア (Spolia)³⁾」と特に呼んでいる。そしてスポリアを使うことは、利便性だけでなく政治的・宗教的な権威の主張に有効であるという。例えば、コンスタンティヌス帝は新皇帝としての正当性を示すため、前帝のハドリアヌス像に手を加えて自らの凱旋門に組み込んだ (ヨキレット



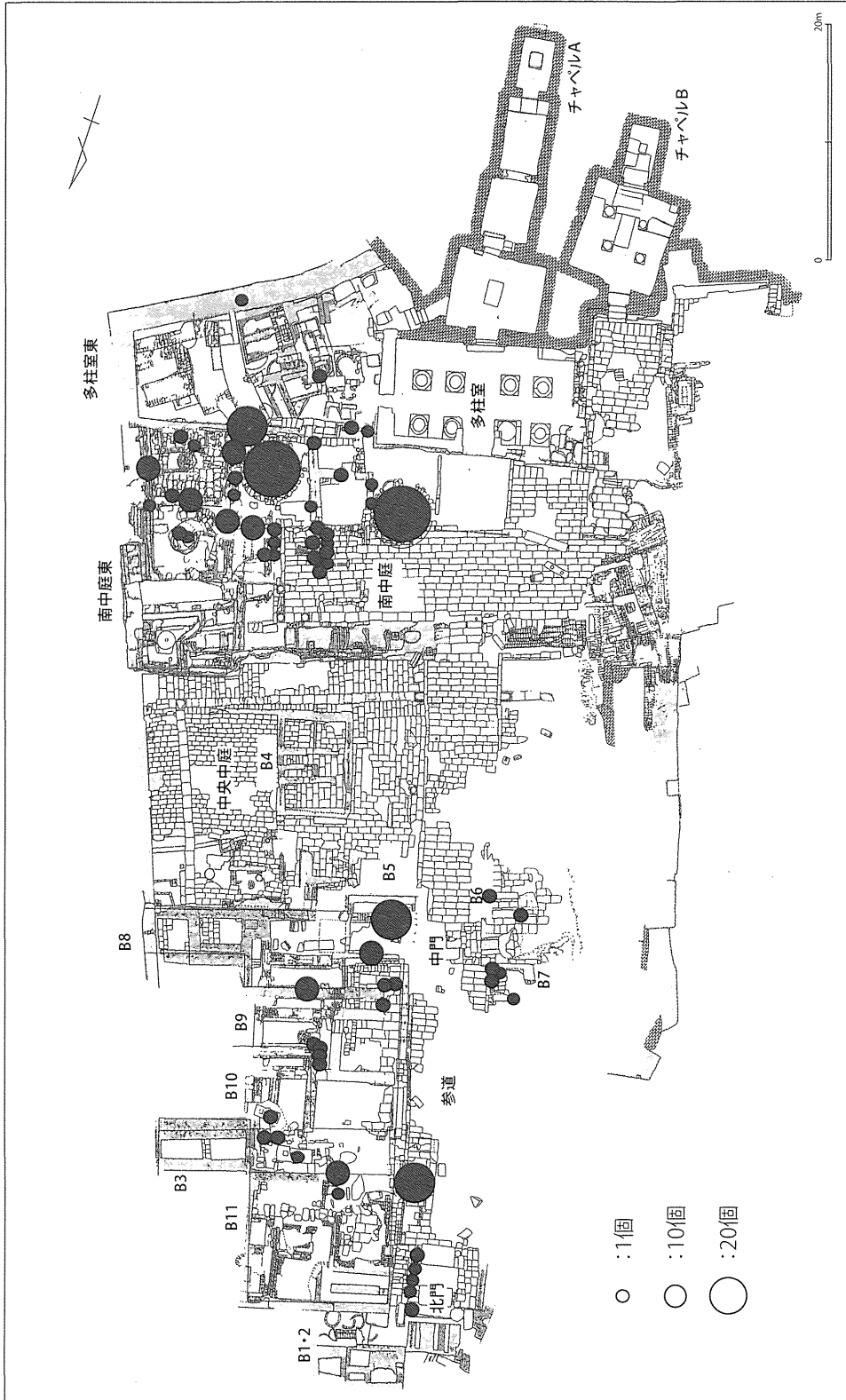
第3図 西方神殿域の遺構名称 (Kawanishi and Tsujimura 1995 を改変)

2005)。また初期教会建築におけるスポリアの配置には規則性がみられ (Deichmann 1964)、一つの空間に様式や材質の異なるスポリアを併用することによって空間区別や空間装飾を行ったことが報告されている (Brandenburg 1996)。

エジプトにおいてこの方面の研究が乏しいのは前述のとおりであるが、それでも王朝時代の建造物については、王朝史を語る手立てとして数多くの再利用例が指摘されている。しかしながら、王朝時代以後については、神殿をコプトの隠遁者の棲家にした例や神殿部材を建物に転用した例は報告されているものの、そこから歴史上の意味にまで踏み込んだ研究はほとんど管見に触れない。数少ない研究例としてホーバリー (M. Horbury) のものがあるが、対象が上エジプトのルクソール地域に限定されている (Horbury 2009)。そうした状況にあって、中エジプトのアコリス遺跡における転用例は、まさしくこの王朝時代以降の蓄積の乏しい時期に相当する。そこで本稿では建築上の再利用行為に着目し、資料の恵まれたアコリスの西方神殿を対象にして、詳細な分析を行うところから出発したい。

II. 無文字の部材の転用例

前章で少し触れたように、西方神殿 (Western Temple) と報告書 (Kawanishi and Tsujimura 1995) で呼ばれている神殿は、複数の聖廟堂と礼拝堂で構成されている。そのうちネロ神殿または報告書でチャペル A と名付けられた聖廟堂はかつての廟墓を拡張したものであり、北に向かって多柱室・南中庭・ローマ様式の柱廊・中央中庭・中門・北門が付属する (第3図)。これらはローマ時代前期にネロ帝をはじめ複数の皇帝が増改築を行い、その様子を皇帝の名の



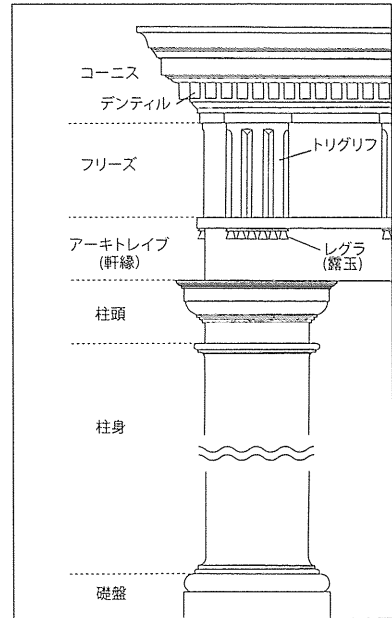
第4図 西方神殿域における転用例の分布

記された奉献碑や参道の軸の変化からうかがうことが出来る。

アコリス遺跡の住居址は大半が日乾レンガで構成されているが、西方神殿域では日乾レンガ建物址の一部に再利用石材が含まれる例を至る所で確認できる（第4図）。再利用石材は文字の刻まれていない部材と文字の確認できる石碑やブロックに区分できるが、本章では前者に焦点を当て、再利用場所・方法・年代を探っていくことにする。なお石材は便宜上、本来の機能に基づいて神殿材・オリーブ搾油器・自余に細分した。

1. 神殿材

再利用した神殿材は主としてギリシア・ローマ様式であり、もとは西方神殿の柱廊を構成していた部材であると思われる。全体的にみると南中庭の東側に集中している。再利用した神殿材として、コーニス・フリーズ・アーキトレイブ・柱頭・柱身・礎盤を確認できる（第5図）。各々の再利用場所・方法をみたところ、同じ部位を一箇所に集中して利用する傾向はみられず、部材に対する転用時の加工方法も多岐にわたっている。例えば同じコーニスでも、本来の装飾面を削って単なる直方体のブロックに改変した例もあれば、まったく加工を行わずに日乾レンガ住居の中に組み込んだ例もある（第6図）。用途も、床面、外壁、壁芯材など、多岐にわたっている。柱身の場合は、縦方向に2分割した例もあれば、ドラム式円柱を四半に分割して粉挽き施設とらしい円形敷石の一部に組み込んだ例もある（第7図）。



第5図 神殿の部位の名称
(ヴィニョーラ 1984 を改変)



第6図 装飾面を削り取られたのちに壁の一部に転用されたコーニス



第7図 円形敷石に転用された円柱及びヒエログリフ入り石材



第8図 床石に転用されたオリーブ搾油器

2. オリーブ搾油器

オリーブはプトレマイオス朝期以降、エジプトにおいて積極的に栽培が行われた作物であり、オリーブ油は日用品としても交易品としても重要な地位にあった。後3世紀まではファイユーム (Fayyum) 地方がオリーブ栽培・搾油の中心地であったが、4世紀に干ばつにより生産が衰退して以降は各地で栽培・搾油を行うようになった。アコリス遺跡から

12基の石灰岩製のオリーブ搾油器が出土しており、それらを分析した辻村によると、後4-5世紀に生業活動の一環としてオリーブ搾油を行っていたという (Tsuji-mura 1995c)。

アコリスで確認されているオリーブ搾油器のうち4基が西方神殿域内にあり、そのうち3基が建材として転用されている。それらの大きさは2.0-2.5×1.2-1.3×0.6-0.7mである。石材上面に環状の溝を彫り、突出した注口を作り出し、溝の両脇に四角い孔をあけている。これらの2孔には搾油装置を支える木柱が立ち、搾り出た油を環状の溝が受けて注口に導く方式である。再利用したオリーブ搾油器は、北門付近の用途不明の構造物及びB10の第4室⁵⁾、南中庭東側の第4室に認められ、後者の2例は床石として転用している (第8図)。

3. 自余

本来敷石や壁を構成していたらしい無装飾の石材や錠用の穴を彫った石材に加え、焼きレンガなども再利用している。再利用先はB3・4・8・9、南中庭、南中庭東側などの日乾レンガ建物の壁の一部や基礎石、そして階段である。石材は一辺が10cm程度のものから100cmを超えるものまで、大きさが様々である。無装飾の石材は1箇所にも10-数10個単位で再利用する例が多く、その際には同程度の大きさの材を選択して並べている。

また2点の彩色石材も確認できる。1点は南中庭の東側第4室の入り口脇にある日乾レンガ壁を構成している石材である。この石材には赤色と黒色の顔料が残存しているが、描いた内容は不明である。もう1点は南中庭の東側第5室にある、花模様の浮彫を施した建築部材である。ドラム式円柱部材とともに、装飾面を伏せた状態で粉挽き施設の一部に利用している。転用部材を用いた壁には漆喰を塗布した例もあり、その場合は転用部材を使ったのかどうか外見からは分からなかったに違いない。

以上、無文字の部材をみてきたが、いずれも第一次利用の際に石材が持っていた特性、すなわち石材の美的要素や神殿の持つ聖性を、再利用時に意識した配置は見当たらない。つまり再利用は、本来の機能を考慮せず、石材自体の大きさや形を基に行われたと考えられる。

Ⅲ. 石碑・文字の確認できるブロックの転用例

1. 文字のみの石碑・ブロック

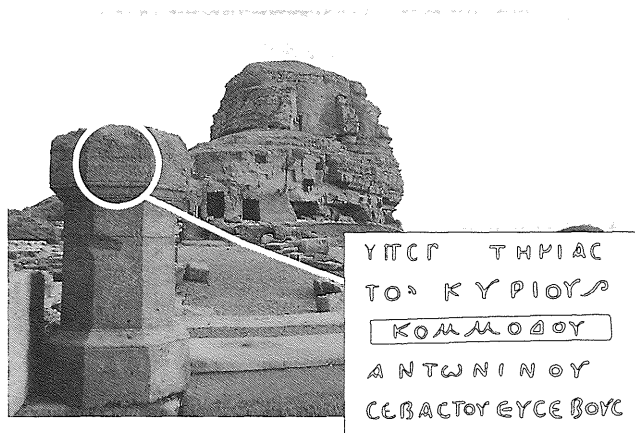
石碑にみとめられる文字は、ヒエログリフ・ギリシア語・コプト語である。これらのうちヒエログリフのみの5点は、全て南中庭及びその付近で検出されている。転用先は、粉挽き施設(第7図)、南中庭東側の第1室の出入口、外壁のそれぞれ一部を構成しているところから分かるように、点在している。

ギリシア語例の計5点は、奉献碑と記念碑の2種類に区分できる。本来西方神殿に奉納したものの一部と考えられるが、現在は神殿域内に散在している。例えば「紀元後29年」「ヘラ神(Hera)とアフロディテ神(Aphrodite)に捧げる」と刻んだ碑は、B10の第3・4室を分かつ壁の一部に、カリグラ帝治世(後37-41年)の碑は、多柱室東外壁上の日乾レンガ建物の一部にそれぞれ利用されている。ギリシア語の碑には再利用していない例も多くあり、1900年初頭の発掘調査記録をみると、南中庭上に原位置で出土した10基余りの碑を確認できる(Lefebvre and Barry 1905)。この再利用した碑とそうでないものとの間に具体的にどのような違いがあり、そこに何らかの選択が働いていたのかどうかについては残念ながら分からない。

その他には、ローマ時代前期の例のうち1点に、「貯蔵庫」という記述がある。これは貯蔵庫の建造を記念した碑であると思われる。文字面を含めて縦方向に2等分した状態で、南中庭の第1・2室を分かつ壁として正立させていた。以上のいずれの石碑も、本来の機能とは関連なく再利用したと評価することができる。

一方、上記と異なる利用法が1例みられる。原位置にある北門の門柱を、本来の機能を維持し原位置を保ったまま二次的に利用した例である(第9図)。すなわち、門柱の碑文に2人の皇帝の名前が認められ、3行目にコンモドス帝(Commodus: 在位後180-192年)の名を、続く4・5行目にアントニヌス・ピウス帝(Antoninus Pius: 在位後138-161年)の名を刻んである。ところが、アントニヌス・ピウス帝の名前は正式名称のうち末尾の3語しか確認できない⁶⁾。石碑を仔細に観察すると、コンモドス帝の名を刻んだ方形面を、外圍よりも一段低く彫り下げ

てあることが知られる。以上のことから、門柱に本来アントニヌス・ピウス帝の正式名称のみを刻んでいたが、その後コンモドス帝の時代に前半部分を削り、彫り直したと考えられよう。これは、門柱としての機能は維持させつつも、碑文の内容を一部書き換え、転用したことを示している。なお、アコリス遺跡より出土しているゲタ帝



第9図 北門柱(丸内に碑文が刻まれている)



第10図 竈内に転用されたブロック

(Geta: 在位後 209-211 年) の名を記した碑でも、一部文字を削り取ったことを確認できる。

2. 神や人物の描かれている石碑・ステラ

人物ないしは神を描いてあるステラは5点を数える。いずれも王朝時代特有の平面的な描写様式であるが、そのほとんどが脚部または上半身しか残存していない。上記のうち上下を反転して置いた例が4点にのぼる。残りの1点も装飾のない面を壁の外側に向けてあるので、装飾がみえない状態で利用したことになる。転用場所は南中庭の東側第2室に集中している。

他に特筆すべきブロックは、直方体を呈し、多柱室東にある竈の一部に利用した例である(第10図)。これは石材の上面と側面にレリーフを施した唯一の例

であるだけでなく、双方の面の内容に関連性がみられない点が非常に興味深い。つまりこのブロックは、まずローマ時代前期以前にレリーフを彫り、時代を経て新たな面を表にして別のレリーフを加え、以前とは別の場所の装飾に利用した。そしてさらに時代が下った後にそれを解体し、竈の一部にしたということになる。現在は竈が崩れているためレリーフ面が露出しているが、竈が稼働していた当時は、装飾面がみえない状態であった。

IV. 転用年代とその状況

以上通覧してきた西方神殿域の転用例を時代別に区分してみたい。アコリス遺跡の建物址を構成している日乾レンガは、以下の表のような編年が組まれている(第1表)⁷⁾。日乾レンガ建物に組み込んだ転用材は、日乾レンガと同時期にその場所に設置したと判断できるため、日乾レンガの編年をもとに時代の推定が可能になる。

第1表 日乾レンガの編年

タイプ	日乾レンガサイズ (cm)	時期
32cm タイプ	32×16×12※	紀元後3世紀末-4世紀前半
29cm タイプ	29×14×10	4世紀前半-5世紀前半
26cm タイプ	26×13×8	6世紀
24cm タイプ	24×12×8	6世紀末-7世紀後半

※縦×横×厚さ

前頁の編年案に則って転用例を時代区分してみたところ、ローマ時代前期に転用した石材は北門の門柱のみで、転用を行った年代はコンモドス帝の治世下である後180-192年と考えられる。それ以外の転用例はことごとく後6世紀以降であり、特に6世紀末-7世紀後半にその増加が見受けられる。



第11図 ハトホル柱頭(破壊され、逆転された状態で粉挽き施設の一部に転用されている)

6世紀以降に再利用した石材は、全て本来の用途を継承していない。すでに触れたように、再利用の行為者は石材を実

用的な建築部材の一部としてみていたのである。例えば南中庭東側の第4室では、ひとつの建物の再利用材の中にコーニス、柱身、柱頭、オリーブ搾油器、ステラなどの多様な石材が含まれる。転用時の石材ごとの加工法が多岐にわたる点も注意される。コーニス、アーキトレイブ、柱頭、柱身、ギリシア語碑は、いずれも本来の形状を保つ例と再利用時に加工した例とがみられ、石材の本来の用途が再利用時に何らかの影響を及ぼしたとは考えにくい。

影響を及ぼした例がもしあるとすれば、それは図像のレリーフを有する石材の扱いであろう。すなわち、図像面の上下を逆転させあるいは表裏を反転させた例があり(第11図)、しかし正立状態で露出した例がみられず、この点を重視するならば、図像の忌避ひいては否定という意味での影響を及ぼした可能性が考えられる⁸⁾。この可能性の存在を重視するならば、転用行為者は、部材そのものの大きさや形態を優先し、必要に応じて石材を分割し、加工を施した、とまでは断定できない。しかし、これに該当する石材は全転用材の10分の1にも満たないことを考慮すると、実用的用途が転用の主流を占めていたとみて大過はないであろう。

以上、目的を異にした2種類の転用例を紹介した。これらを比較すると、本来の機能を維持した再利用は2世紀末のものであり、本来の機能を大幅に無視した実用的転用は6,7世紀が中心である。つまり、双方の間に年代が開きがみられるのである。

V. 転用例が語るもの

1. 実用的転用の意義と時代背景

前章で述べた北門のコンモドス帝による名前の上書きは、碑文から前の皇帝の名前を消し、自らの名前を彫り直すことで、前皇帝を否定して自らを権威づけることを意図したと思われる。つまりこの例は、スポリア利用に該当する。すなわち、スポリアに美的あるいは象徴的価値を見出し、その価値の利用を意図して転用行為を行ったと考えられる。アコリスにおいてスポリア利用を実行した2世紀後半は、在地の役人やエジプト内外の富裕層が西方神殿に奉獻碑を多く納めた時期と重なる(Bernard 1988)。これらのことから、遅くとも2世紀後半までは

西方神殿がアコリス内の象徴的かつ重要な地位にあったこと、その当時のアコリスがローマ皇帝の支配が行き届く重要な拠点であったことが推測できよう。

それではなぜ、アコリスで6世紀から7世紀にかけて盛んに神殿材や自余の石材を転用するに至ったのであろうか。そもそもエジプトにおいてローマ時代前期 - コプト期は多神教から一神教への移行期にあたる。すなわちこの間に、ヘレニズム期に信仰が盛んであった古代エジプト神とギリシア・ローマ神が習合した多神教的宗教（以下、伝統宗教）から、一神教であるキリスト教へ移行したわけである。

当該期の宗教研究は、これまで専ら歴史学、宗教学の分野において、キリスト教研究の一端として盛んに行われてきた。例えばベル (H. Bell) は、キリスト教信仰の中心地であったアレキサンドリアの文献資料などから、エジプトがキリスト教化する過程を追った。そのなかで後1世紀を「異教の黄昏時」と称し、キリスト教の普及が本格化する2世紀以前に伝統宗教が衰退しつつあったと主張している (Bell 1953)。またコプト学者のバダウィ (A. Badawy) は、キリスト教が公認された後の4世紀半ばには、すでにエジプトに暮らす大半の人々がキリスト教化していたとする見解を述べている (Badawy 1978)。

エジプトにおいてキリスト教が受容された理由を究明する研究の中でもまた、伝統宗教が取り上げられている (例えば Atiya 1968)。受容の要因として、エジプトにおけるキリスト教聖職者がホルス神とイシス神⁹⁾をイエスとマリアに擬え、またアंक (古代エジプトの護符のモチーフ) と十字架を並列させて絵画に盛り込むなど、伝統宗教を一部キリスト教に取り込んだことを挙げている。

一方、1970年代以降に活躍したブラウン (P. Brown) は、パピルス文書や修道院の教父が著した資料をもとにして、4、5世紀まで伝統宗教が、特に地方において勢力を保持していたことを指摘している (ブラウン 2006)。しかし「エジプトの村落社会では沈黙の宗教戦争が遂行中」であり (同上: 161)、「修道士たちの立場は、異教世界の宗教形態に対する破壊的な非難」であったとし (同上: 163)、伝統宗教とキリスト教の間に対立があったと主張している。このような主張の背景には、392年のアレキサンドリア・セラペウム神殿に対するキリスト教徒の攻撃や、4世紀後半のシェヌートらによる伝統宗教廃絶運動といった、一部のキリスト教徒集団による伝統宗教への迫害を文献資料で強調していることが挙げられる (Atiya 1991, Kristensen 2010)。キリスト教と伝統宗教の対立を研究者に印象付けてきたのは、この理由による。

このような当該期の宗教研究に新たな一石を投じたのが、フランクファーター (D. Frankfurter) である。聖職者側からみた制度宗教に主眼を置くのではなく、当時のエジプトの信仰世界の具体的な様相に着目した。つまり、民衆も対象に含め、信仰の実践がいかに行われていたのかを研究の目的としたのである。パピルスや碑文などの文献資料や、神像及びレリーフなどの図像資料をもとに複合的な分析を行い、キリスト教が313年に公認された後は制度宗教としての多神教信仰は姿を消していくものの、地域によってはその土地の民衆が協力して旧来の儀式に倣った祝祭を執り行い続けるなど、伝統や慣習として伝統宗教の名残が長期間うかがえると

主張した。またその間、伝統宗教とキリスト教は対立せず共存していたとも述べている (Frankfurter 1998)。

そこで、アコリスにおける伝統宗教の存続について文字資料から検討してみると、西方神殿の多柱室に残る後3世紀末-4世紀末にかけての13例のグラフィティが注意される。これらにはナイル川の増水を記念して祝祭を行ったことが記されている。すなわち、284年から305年まで1,2年ごとに残された讃歌の中に、アモン (Ammon) 神, スーコス (Souchos) 神, ヘルメス (Hermes) 神, ヘラ (Hera) 神といった王朝時代の神々とギリシア・ローマ神の名や、祝祭を執り行った神官の名が含まれており、伝統宗教に則って祝祭を行っていたことがうかがえる。その後しばらく記録は途絶えるが、再び4世紀末に2つのナイル讃歌が記される。これらは前者と異なり、伝統宗教の神々や神官の名は登場しないものの、ナイル川の増水に対する喜びは変わらず記されている。しかし、5世紀になると、その記録は全く絶えてしまう。

また、岩山を挟んで西方神殿と反対側にある南地区をみると、岩壁上方に双子のディオスクーロイ (Dioscuri) と、その間に立つ女神の像が彫られている。ディオスクーロイとはギリシア神話に登場する、ゼウスの双子の息子である。彼らはギリシア・ローマ時代に戦場の守り神や航海安全の神として信仰され、ローマ時代前期に至っても、王朝時代以来のワニ頭のソベク (Sobek) 神と習合して尊崇を集めた (山花 2003)。ソベク神というと、アコリスではラムセス三世の磨崖碑に表現されているように、遅くとも新王国時代の後半には都市神としての地位を獲得していたことが知られている。ジャバル・アッテール・バハリ (Jabal al-Tair Bakhri) 遺跡、アル・バベン (al-Baben) 遺跡など、アコリス周辺の遺跡でもその信仰が確認されており (Kessler 1981)、近傍一帯がソベク神信仰のひとつの中心であったことがうかがわれる。ギリシア・ローマ時代においてもスーコスという名で信仰が維持され、また大量のワニのミイラが西方神殿で出土している点も考慮すると、ディオスクーロイがここに表現されたこともうなずける。

ディオスクーロイ像直下の階段の脇から動物骨と炭が一塊となって多数検出され、動物骨の周辺からランプ、土器、ファイアンス製容器、ガラスなどが出土している。動物の種類はウシ、ブタ、ヒツジ、ヤギといった四足動物が主であるが、少量の鳥と魚 (ナマズ) の骨も確認されている。キリスト教では犠牲獣を捧げないため、これらは伝統宗教の儀式の供物であったと考えられる。破片も含めると計35点のランプが出土しているが、そのうち10点が前カエル型 (Pre-Frog Type) である¹⁰⁾。前カエル型ランプは後200年頃にエジプトの広範囲で用いられた形式である。また後300-400年頃に特徴的なヤシの葉文様型 (Palm Type) ランプ3点も出土している。ランプ全体の特徴としては、持ち手がない点、キリスト教に関連するモチーフがない点、後5世紀以降に特徴的な伸長型 (Elongated Type) ランプがない点が挙げられる。また、出土土器のなかに、“バーボタイン (Barbotine)” という後1-2世紀に特徴的にみられる絞り出し技法 (Wodzińska 2010) が認められる。

以上をまとめると、ランプの時期は後100-400年に集約されることになる。西方神殿域出土

のランプが後7-8世紀に下る製品を含んでいることと対比すると、この結果は興味深い。すなわち、王朝時代の宗教を継承するディオスクーロイを信仰対象とした儀式がこの場所で執り行われた年代は400年を下らないと言え、西方神殿において伝統宗教の存在が確認できなくなる時期ともほぼ重なる。これは、同時期に2つの伝統的な宗教あるいは慣習がアコリスで途絶えたことを意味する。西方神殿の部材を実用的転用に導いた前史として、この点を指摘しておきたい。

アコリスにおける5世紀の伝統宗教の消滅から実用的転用が行われた時期の間には、およそ1世紀の開きが存在する。この空白の期間を埋める手がかりが、オリーブ搾油器の存在である。上述したように、オリーブ搾油の中心地であったファイユームが4世紀に衰退するのと時を同じくして、アコリスでオリーブ搾油活動が始まり、5世紀末まで続いたと推測されている(Tsujimura 1995c)。コプト期において、オリーブ油は生活用品にとどまらず、キリスト教の儀礼の際にも必要とされる聖性を帯びた品物であった。したがって、オリーブ油生産が西方神殿域で行われるに至ったということは、一方で、生産という俗的活動による聖域の侵犯であり、他方で、聖性を帯びた品物を介した宗教活動でもあったことを示唆する。その意味で、神殿域でのオリーブ油生産の操業は、聖から俗への過渡期の姿として、誠にふさわしい。

2. 実用的転用の時代背景

そこで、アコリスにおいて実用的転用をしきりに行った6-7世紀の時代相について考えてみると、街はずれにあたる都市域の西端一帯に多数存在する、24cmタイプの日乾レンガ建物群が注意される。これは、アコリスにおいて6世紀末-7世紀に街が拡大したことを示しているからである。また、上エジプトにおける一大都市であったジェーメーも、6-7世紀頃に既存の周壁を越えるほどの規模の拡充をみせる(Wilfong 2002)など、確認例は多くないがこの時期はエジプトの都市が拡充の傾向を帯びていたことが察せられる。

7世紀というと、その中頃にイスラム軍がビザンツ帝国に侵攻し、ビザンツ帝国は大きな打撃を被ったという。エジプトも例に漏れず、648年にイスラム軍の占領を受けたが、その支配地域は当初アレキサンドリアや現在のカイロ周辺に留まり、7世紀を通じて中・上エジプトへの直接的な支配の影響は少なかったと言われている(長谷川 2001)。そのためであろうか、アコリスやジェーメーで都市域の拡充がみられるように、当該期のエジプト都市の活況は衰えをみせなかったようである。このような状況の中で、建材の需要が高まり、西方神殿周辺の機能を失っていた柱廊の部材などが恰好の建築材として転用され続けたのであろう。

この実用的な転用について特筆すべきは、同時代における類例がエジプトに留まらないらしい点である。例えばアテネでは既存の建物をレンガで小さく区画して利用した形跡があり、他の建物もオリーブ搾油施設に転用した例が報告されている(Cameron 1993)。その他にも北アフリカなど地中海沿岸で複数例が確認されている。アッティカ(Attica)のオリンポス(Olympos)では在来の宗教施設が転用され、チュニジアのスベイトラ(Sbeitla)では、街のかつての主要

道路の上にオリーブ搾油器が設置された。これらに共通するのは、いずれも転用時期が6-7世紀に該当する点である。要するに、アコリスにおいて行われたような6-7世紀の実用的転用という現象は、同時期の地中海方面に広く認められるのである。

同時期の地中海沿岸の様相として、6世紀頃からイタリアの西海岸の都市が衰退し、他方、西アジア地域ではエフェソス（Ephesos）などのように7世紀前半頃まで活発な都市活動を繰り広げていたことも知られている。この点を加味すると、実用的転用は、伝統的宗教の権威の消失と都市の活発な活動が共に生じた際に起こる必然的現象であり、これは地中海方面とも同調した動きであったといえる。

VI. おわりに

本稿ではアコリス遺跡の西方神殿を主な対象とし、既存の建物などの部材を転用した様子から、当時の社会状況を考慮に入れつつ人々の宗教的心性に迫ることを試みた。その結果、転用行為として2種類が存在することを明らかにした。象徴性の利用を意図した2世紀頃の転用と、6-7世紀に主流を占めた実用的転用である。そして、前者からはローマ本国の支配がエジプトの地方社会にも行き届いていたこと、後者からは伝統宗教の権威の消失と都市の拡充があいまって発生したことをそれぞれ論証した。さらに、その間の4-5世紀はオリーブ搾油施設の存在が示唆しているように、多神教から一神教への転換期にあたっていたのである。

以上、これまで転用から考えられる宗教的心性の変容とその背景を探ってきたが、変容だけでなく、継承も考えられることを最後に補足して結びとしたい。忌避にせよ否定にせよ転用にあってアコリスの人々が図像を意識していたらしいことはすでに述べたが、伝統宗教が消失しキリスト教化した以後も、エジプトの人々の心底に伝統宗教の記憶の残存したことを示唆する証左がある。すなわち、キリスト教のイコンや修道院の壁画に伝統宗教との関連を考えさせる動物を聖化したモチーフがみられ、コプト暦の月名の一部が古代エジプト神の名に由来し、シャンミネシム（春香祭）のように祝祭に王朝時代の伝統をとどめ、今に存続している。さらに、場の継承という点からみると、エジプトの多くの修道院がそうであるように、王朝時代の神殿の廃絶地にキリスト教施設が営まれている。論証は省くが、アコリスもまたこの例に漏れない。つまり、古代エジプトの神々が完全に消失したのではなく、人々はその権能の一部にせよキリスト教の神や聖人に付託して信仰心を満たしたらしい断片が垣間みえるのである。ローマ時代以降のエジプトにおける宗教事情として、当時の人々の心底に測鉛を下すならば、このような変容と継承の2つの構造がみて取れるのである。

これまで縷述した結果が示しているところであるが、アコリスの転用例は、固有の事情を内包しつつ、しかしエジプト全土さらには地中海世界との同調をみせていた。他の地域においても、このような転用史の実証的研究が積み重ねられるならば、エジプト古代末期の研究はさらに豊かな成果を紡ぎだすに違いない。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、古代オリエント博物館共同研究員の花坂哲氏に懇切なご指導、ご教示をいただいた。また日本学術振興会カイロ研究連絡センター長の長谷川奏先生に貴重な助言を賜り、文献資料の恩恵にあずかった。そして、一次資料の提供を許可いただいたアコリス調査隊並びに関係者の皆様、調査に際して助力して下さったテヘネ村の人々に末筆ながらお礼を申し上げたい。

註

- 1) 「アコリス」という名称はギリシア・ローマ時代のもので、王朝時代には「メル・ネフェル」(*Mr-nfr*) などと呼ばれていたことが知られている。
- 2) 先史時代に象徴的資源として利用された埋葬墓の研究は溝口 1993, Bradley 2002 などを参照されたい。後代における古墳の再利用に関しては、田中・吉澤 2011 などを参照のこと。
- 3) スポリアはラテン語で「戦利品」を意味する “*Spolium*” が語源となっている。
- 4) 空間区別とは、例えば聖職者と信徒の空間の区別や、教会内の重要性の差異づけなどが挙げられる (Brandenburg 1996, 高根沢 2007 など)。
- 5) 本稿における「B」及び「室」は、それぞれ 95 年のアコリス報告書 (Kawanishi and Tsujimura 1995) における Building 及び Room を指す。
- 6) アントニヌス・ピウス帝は積極的に神殿の改修及び増築を行った人物であり、ハルガオアシスのアル・ザヤーン (Qasr al-Zaiyan) 神殿にも彼の名が刻まれているが、ここでは正式名称が確認できる (Jackson 2002)。他にはアスワン (Aswan) のクヌム (Khnum) 神殿にもアントニヌス・ピウス帝の名が確認できる (Jackson 2002)。
- 7) 日乾レンガの時代編年は辻村純代のそれに依拠する (Tsujimura 1995a)。
- 8) 辻村はアコリスから偶像破壊事件を示すオストラカが出土していることを指摘し、アコリスで王朝時代のステラが上下逆転していることと、シェヌートらによる異教排斥運動との関連性を示唆している (辻村 1996)。
- 9) イシス神とホルス神は古代エジプト宗教の中で母子の関係にある。
- 10) ランプの形式及びそれに基づく編年に関しては Tsujimura 1995b を参照した。

参考文献

- Atiya, A. S. 1968 *A History of Eastern Christianity*. London, Methuen.
- Atiya, A. S. (ed.) 1991 *The Coptic Encyclopedia*. New York, Maxwell Macmillan International.
- Badawy, A. 1978 *Coptic Art and Archaeology: The Art of the Christian Egyptians from the Late Antique to the Middle Ages*. Cambridge, mass., MIT Press.
- Baines, J. and J. Malek 1983 *Atlas of Ancient Egypt*. New York, Facts on File.
- Bell, H. 1953 *Cults and Creeds in Graeco-Roman Egypt*. Liverpool, Liverpool University Press.
- Bernand, É. 1988 *Inscriptions Grecques et Latines d'Akôris*. Institut Français d'Archéologie Orientale, Cairo.
- Bradley, R. 2002 *The Past in Prehistoric Societies*. London and New York, Routledge.
- Brandenburg, H. 1996 Die Verwendung von Spolien und originalen Werkstücken in der spätantiken Architektur. In J. Poeschke (ed.), *Antike Spolien in der Architektur des Mittelalters und der Renaissance*. München, pp. 11-48.
- Cameron, A. 1993 *The Mediterranean World in Late Antiquity AD 395-600*. London and New York, Routledge.
- Deichmann, F. W. 1964 Vom Tempel zur Kirche. In A. Stuiber and A. Hermann (eds.), *Mullus: Festschrift Theodor Klauser*. Münster, pp. 52-59.
- Frankfurter, D. 1998 *Religion in Roman Egypt Assimilation and Resistance*. Princeton, Princeton University Press.

- Horbury, M. 2009 *Personal Identity and Social Power in New Kingdom and Coptic Egypt*. Oxford, Archaeopress.
- Jackson, B. R. 2002 *At Empire's Edge: Exploring Rome's Egyptian Frontier*. New Haven and London, Yale University Press.
- John, R. 1992 *The City in Late Antiquity*. London and New York, Routledge.
- Kawanishi, H. and S. Tsujimura (eds.), 1995 *Akoris: Report of the Excavation at Akoris in Middle Egypt 1981-1992*. Kyoto, Koyo Shobo.
- Kessler, D. 1981 *Histrische Topographie der Region zwischen Mallawi und Samalut*. Darmstadt, Wiesbaden.
- Kristensen, M. T. 2010 Religious Conflict in Late Antique Alexandria: Christian Responses to "Pagan" Statues in the Fourth and Fifth Centuries CE. In G. Hinge and A. J. Krasilnikoff (eds.), *Alexandria – A Cultural and Religious Melting Pot*. Aarhus University Press, pp. 158-175.
- Lefebvre, G. and L. Barry 1905 *Raport sur les fouilles exécutées a Tehneh: en 1903-1904*. Annales du Service des Antiquités du l'Égypte. vol.6. pp. 141-158.
- Tsujimura, S. 1995a Chronology of Mud Bricks. In H. Kawanishi and S. Tsujimura (eds.), *Akoris: Report of the Excavation at Akoris in Middle Egypt 1981-1992*. Kyoto, Koyo Shobo, pp. 265-268.
- Tsujimura, S. 1995b Chronology of Pottery Lamps. In H. Kawanishi and S. Tsujimura (eds.), *Akoris: Report of the Excavation at Akoris in Middle Egypt 1981-1992*. Kyoto, Koyo Shobo, pp. 268-269.
- Tsujimura, S. 1995c Olive Oil Production in Akoris. In H. Kawanishi and S. Tsujimura (eds.), *Akoris: Report of the Excavation at Akoris in Middle Egypt 1981-1992*. Kyoto, Koyo Shobo, pp. 464-470.
- Wilfong, G. T. 2002 *Women of Jeme: Lives in a Coptic Town in Late Antique Egypt*. Ann Arbor, The University of Michigan Press.
- Wodzińska, A. 2010 *A Manual of Egyptian Pottery. vol.4: Ptolemaic Period-Modern*. Boston, Ancient Egypt Research Associates, Inc.
- ヴィニョーラ, B. G. 1984 『建築の五つのオーダー』長尾重武(訳), 中央公論美術出版《Vignola, G. B., La Regola delli Cinque Ordini d'Architettura.》
- 高根沢均 2007 「サンタニューゼ・フォーリ・レ・ムーラ聖堂におけるスポリアの配置とその意味」『日本建築学会計画系論文集』第616号 191-197頁.
- 田中 裕・吉澤 悟 2011 「古墳の正面に納められた奈良時代の火葬墓—茨城県つくば市平沢3号墳出土骨臓器—」『筑波大学 先史学・考古学研究』第22号 25-40頁.
- 辻村純代 1996 「アコリスの都市生活」金関 恕・川西宏幸編『都市と文明』講座 [文明と環境] 4 朝倉書店 173-189頁.
- 長谷川奏 2001 「村落と社会組織の考古学—コプト社会からイスラム社会への変貌—」高橋龍三郎編『現代の考古学シリーズ 村落と社会の考古学』朝倉書店 251-269頁.
- ブラウン, P. 2006 『古代末期の形成』足立広明(訳), 慶應義塾大学出版会《Brown, P., *The Making of Late Antiquity*. Cambridge, mass., Harvard University Press.》
- 溝口孝司 1993 「『記憶』と『時間』—その葬送儀礼と社会構造の再生産において果たす役割—」ポスト=プロセス考古学的墓制研究の1つの試みとして」『九州文化史研究所紀要』第38号 九州大学文学部九州文化史研究所施設.
- 山花京子 2003 「古代エジプトにおけるヘレニズムの神々の受容について: 中部エジプトのアコリス遺跡を例に」『文明』No.3 67-76頁.
- ヨキレット, J. 2005 『建築遺産の保存 その歴史と現在』立命館大学歴史都市防災研究センター叢書 秋枝ユミイザベル(訳), アルヒーフ《Jokilehto, J., *A History of Architectural Conservation*. Oxford, Butterworth-Heinemann.》

The Presence and Usage of Spolia in Akoris

MORIKAWA, Manami

Spolia is a term for reused material. In Akoris, a middle Egyptian site, many buildings from the Western Temple area contain Spolia. In Akoris, former temple and monument construction materials are reused as Spolia. This thesis focuses on religious buildings from the Roman to Coptic periods and the study of Spolia used in construction of these newer monuments.

Analysis indicates that Spolia in Akoris consist of two different types: 1) ancient material reused due to its value 2) and due to its quality and durability. Spolia present in second century construction were still in relatively good condition indicating that Roman emperors ruled even local societies like Akoris in good order. Their presence and condition later in the sixth and seventh century is harder to define suggesting a decline in traditional religions, urban expansion and population increase. Of interest is the fact that other similar cases occurred throughout the mediterranean world at the same time.

The survival of these reused materials into Christian periods seems to indicate their being part of an inherited social memory.